

次は、特集についてです。特集を取り入れることの重要性は分かっているけれども、アイデアが浮かばない、アンケート調査が面倒、まとめ方がわからない…などの声がよく聞こえます。せっかく調査をしても、回答を集計し結果を掲載するだけでは興味を引きません。広報部が少なくなっている原因の一つとして、特集を企画するのが面倒だからという声も聞かれます。しかし、この後紹介する学校はいずれもそういう問題を解決するために様々な工夫をしています。必ずしもアンケートをしたり、部員がすべて考えなくても、興味を引く特集はできるようです。

取組例です。

まず、大賞を受賞した岩見沢市立みどり中学校の広報紙です。この広報紙で目を引くのは、トップ記事の「緑中学校 校長の決断と挑戦」という特集です。「日課の改定」「チーム担任制」について校長先生にインタビューし、小見出を「2030年度から改定される教育課程を先取り」「火曜日は数学の学力向上に特化」など目立つように位置づけ、イラスト入りで紹介しています。さらに先生や生徒の反応、先生たちにインタビューした「チーム担任制のメリットと課題」なども組み入れてあります。

ここで大切なのは、学校が保護者に伝えたいと思っている内容をPTAが聞き出し、それを記事にまとめていることです。学校と相談すれば、きっと興味深いネタが見つかるはずです。PTAが学校から上手に聞き出し、それをPTAが特集としてまとめ広報紙にしていることに大きな意義を感じます。

次は同じく大賞を受賞した稚内市立潮見が丘小学校の広報紙です。2ページを使って「SNS・ネット依存について考えてみた」という特

集をしています。実はこの記事は、講演会の内容を改めて記事にしたものです。イラストや写真入りで、ゆったりとした構成です。小見出しは「ちぢんでいく前頭葉」「制限のないのは日本だけ」「鍵になるのは相談する力」などと興味を引く表現になっています。参加者たちの声が載っていることも大きな意義があります。講演会を行うだけでなく、その内容を特集として魅力ある記事にしていることに大きな意義を感じます。

次は小樽市立朝里小学校の広報紙です。「ステキなあさりの子になるために」という特集がありますが、アンケートや調査などは行っていません。学校の取り組みを紹介した後、それに関する偉人の名言や英語の応援フレーズ、四字熟語、あるいは感謝や挨拶、掃除についての豆知識を載せ、最後に次のように締めくくっています。「小さい頃から周りを気づかえる人は、視野が広くアンテナが敏感で仕事や人間関係に活かされます。そして信頼を得られ友人や仲間たちに囲まれたステキな人生が待っています。」・・・調査やアンケートをしなくても、このような特集ができることを示しています。

旭川市立東町小学校の広報紙は全ページ、「私が小学生だった頃の楽しい思い出」という記事です。これは保護者に投稿を呼びかけ、集まった原稿を広報部員が記事にしたものです。内容は、給食のわかめご飯や揚げパンにまつわる思い出、石炭ストーブについてのエピソード、缶蹴りや十字架鬼遊びなど盛り沢山です。この試みは、保護者に呼びかけその投稿で広報紙を仕上げたところに大きな意義があります。編集後記には投稿者への感謝とともに、「今までの伝統や鮮やかな広報紙を引き継ぐことができなかつたことへのお詫び」が書かれていました。その上で、「これからも題目を変えて、可能な限り広報紙発行を継続していきます。皆様のご意見やアイデアをいただきな

がら、より充実した参加型の広報紙を目指します」と結んでいました。「会員参加型の PTA 広報紙」という言葉には強烈なインパクトが込められており、強く印象に残るものでした。

以上 4 つの取り組みを紹介しましたが、特集というものに対する考えを再認識する参考になると思います。